ROCK‘n’ANGEL

桐生星男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＯＣＫ‘ｎ’ＡＮＧＥＬ

【Ｎコード】
Ｎ１３６８Ｄ

【作者名】
桐生星男

【あらすじ】
城見ヶ丘学園大学の音楽系サークル『邦楽研究会』のメンバーが天使や悪魔を巻き込んで繰り広げるバンド系青春コメディー。

SCENE　01：呪われた白いフェンダー

「Bメロ入るとこの『長い～』のとこ、Fじゃなくて♭Bがよくね？」
「こうか？」
「そうそう。んで、そこにスネアでおかず入れてさ」
「うむ」
タカタンッ――
「あーそれいいね。さすがヤジさん。ちょっと感動。さっすが八年生は違うよね、笑うなそこ」
といいつつケイスケも笑う。
「じゃさちょっとそこんとこもう一回やってみようよ。真奈美、オケー？」
「オケオケー」
ケイスケはドラムのヤジさんのほうを向いてうなずく。ヤジさんがスティックでカウントを取るとスネアの8ビートからBメロが始まる。切ない、張り詰めたような真奈美の唄声。ギターのくぐもったバッキングとシンセの哀愁（あいしゅう）の音色が絡まる。同時に勢いを増して盛り上がっていくベースライン。スネア、タム、ハイハット、シンバルが絶妙な刺激と高揚（こうよう）を与え、曲は一気にサビへと向かう。

「最高」
「ていうか俺ら天才じゃね？」
練習を終えた五人は、サークル会館から裏門を抜けて、飲食街へ向かう道に出た。
「もうすでに大学のサークルの域を超えてるよな、俺ら」
「ほんとに。プロレベルですね、息もぴったしだし」
自画自賛。
「来月の合音、先輩たちを越えるな」

「いやそれは間違いないっしょ」
「ていうかヤジさんは先輩だしー」
「あー忘れてたよ」
「うむ」
笑い声が響く。この五人、いや、四人プラス一人、今年の春に城見ヶ丘学園大学の音楽系サークル『邦楽研究会』略してホーケンに入った新人、プラス、留年を繰り返してとうとう八年生になってしまった寡黙（かもく）な助っ人ドラマーだ。新学期始まった当初からまるで十八年来の付き合いのように妙に馬が合っている。
「ねーねーねー」
紅一点、まだ若干あどけなさを残すこの将来が楽しみなかわいい系美少女はボーカルの真奈美（まなみ）。見た目とは裏腹にその歌唱力の高さは誰もが目を見張るものがある――と本人たちは思っている。
「みんなでなぞなぞ亭にお好み焼き食べに行かない？」
「いいですねーお好み焼き」
これはベースの柚木（ゆずき）。真奈美よりちょっと背が高いくらいの小柄な好青年だ。これも見た目とは裏腹にベースのテクニックは誰もが目を見張るものがある――と本人たちは思っている。
「マヨネーズかけるとおいしいですよね、青海苔（あおのり）と」
ついでに言うと柚木はマヨラー。常時マイ・マヨネーズを携帯している。
「うまいけど、コレステロール高くね？」
これはギターのケイスケ。的確なつっこみを――特に楽曲に対して――するので五人の中ではなんとなくリーダー的な存在になっている。そしてギターのテクニックは誰もが目を見張るものがある――と本人たちは以下略。
「持参してますから。コレステロール、ゼロのやつ」
「マジかよ」
「うぜー」
「オヤジくさー」

「ていうかコレステロール高くね？とかいうヤツの方がオヤジくさくね？」
「俺かよ！」
キーボードのユウジはニコニコしながら後ろからついていくタイプだ。長身のイケメンで入学後一ヶ月もたたないうちに高等部女子のファンがついた。たまーに突っ込みいれたりしている。そしてキーボードのテクニックは誰もが目を以下略。
「うむ」
んで、わりかし無口なひげ面のこのおっさんが、ヤジさんだ。ドラムのテクニックは掛け値なしのプロ級だが、プロになる気はないらしい。

「あー地獄屋が開いてる」
「ほんとだ。やだなあ」
「え、なんで？　柚木君」
「僕、地獄屋やってる日の運勢って最悪なんですよね。この前犬のうんこ踏んだし」
と、柚木は顔をしかめる。
「きたねッ」
「アタシの中では地獄屋が開いてるの見たらいいことあるってなってるよ」
「性格の違いだな」
「だな。真奈美はかわいい」
「ちょっと寄ってみっか」
ヤジさんの提案で五人はぞろぞろと店の中に入った。この地獄屋、大学の裏道にあってめったに店を開けない。どんな店かというと骨董品（こっとうひん）とリサイクル品とカウンターの奥には怪しい漢方薬が置いてあり左奥にはジャンク品が並んでいる。黒の皮のつなぎを着たちょい悪親父、いや極悪狸の経営する店だ。
「ギター見っけ」

「おお、フェンダーだな」
「本物？」
「わかんねー」
「三千円だしニセモノだろ、どう考えても」
「ボディーが真っ白でかわいい」
「ネックはメイプルか。あ、シリアルナンバーがついてる。……54年製フェンダー・ストラトキャスターだな」
「凝(こ)ったニセモノですねー。それって本物だったらいくら位するんですか？」
「億(おく)いくだろ」
「ぶ」
「アタシこれ欲しいかもー」
真奈美はギターを手に持ってかわいらしくポーズを取った。
「ど？」
「いい！」
声をそろえる四人。
「そいつはやめといたほうがいいかもな」
カウンターの奥から極悪狸がのっそりと出てきた。
「はあ？」
極悪狸は極悪な目つきで五人を見回し、苦苦(にがにが)しげに言った。
「そいつはやめといたほうがいい。実はな、そいつは……呪われたギターだ」
「……」
五人は三秒間固まって、それから爆笑した。
「ぶはははは」
「やばいおもしろすぎ」
「その顔でそれはありえなさすぎるー」
「腹痛てー腹痛いてーひっひっふー」
「ちっ」
舌打ちして極悪狸はのっそりと奥へ引っ込んでいった。

「あれじゃね、もしかして本物かもと思って惜しくなったんじゃね？」
「ありえねー」
結局、真奈美はその白いギターを三千円でゲットした。ケイスケはジャンクコーナーのギターピックを三つ買い、ユウジは骨董品コーナーに置いてあった十五センチくらいの黒のリングを買った。
「ていうかユウジ、その輪っか、何？」
「わかんね」
「買うなよ！」

お好み焼き屋『なぞなぞ亭』はサークル会館を出て十分ほど歩いたところにある。腹ごしらえをすませ店を出た五人は、満足顔でそれぞれの家路についた。辺りはすっかり暗くなっていた。
「真奈美ってさ、曲作るとき、アコギ使ってるんだろ？」
「うん、コード押さえるくらいしか出来ないけどね」
「じゃあエレキは初めてだよな？」
「うん」
「一応言っとくけど、エレキってアンプないと音出ないからな」
「知ってるよ！」
「夜中に、音が出ないって電話かけてこられるのは勘弁だからな」
「夜中にギター弾かないって！　ていうかユウジ、アタシのこと馬鹿にしてるでしょ、完全に」
お好み焼き屋を出たあと、帰り道が同じユウジと真奈美がそんな話をしながら歩いていると、道端でうずくまる白い影が目に入った。
「なんだろう、あれ」
影はすっと立ち上がると、二人のほうに歩いてくる。よく見ると高等部の制服を着た女の子だった。
「ファンの子じゃない？」
「うーん……紺色だよなあ、うちの高等部の制服。さっき一瞬白っぽく見えたんだけど」

「あーそういえばそうよね、光の加減？」
女の子はすれ違いざま、真奈美に何かをささやいて、ごきげんな様子で走り去った。真奈美は呆然（ぼうぜん）と立ち尽（つ）くしている。
「どした、真奈美。いまの子、なんか変なこと言った？」
「うん」
「なんて？」
「誰にも内緒だけど、実は私、天使なの……って」
「へ？……マジかよ」
「あと」
「あと？」
「青海苔（あおのり）が歯にくっついてるって」
「ぶ、ははは」
「笑うな！」
「ぐわッ」
真奈美の拳（こぶし）がユウジのみぞおちに突き刺さった。

SCENE　02：コスプレ少女降臨

翌日、ユウジがメインストリート広場のベンチに座って次の授業までの空き時間をぼんやりと過ごしていると、柚木がパックの牛乳を飲みながらやって来た。
「昨日はあれから最悪でしたよ」
「悪魔でも出たか？」
「コーラ買おうと思って自販機の前でポケットから金出そうとしたら」
「ぶ、ははは」
「いや、まだ言ってないですから」
「ほんと運勢最悪だったな」
「……そうなんですよ」

夕刻、ユウジがサークル会館三階にある邦研（ほうけん）練習室に行くと、何やら騒ぎがおきていた。他のサークルの奴らも野次馬で集まってきている。
「おい、どうしたんだ？」
ユウジが人ごみを掻き分けながら言った。
「なんか殺人事件らしいぜ」
「うっそ」
「いや、殺人事件じゃなくて宇宙人が降りてきたんだろ」
「いやいや、宇宙人じゃなくて天使だろ、天使」
「かなりの美少女らしいぜ」
「マジかよ」
「なんだ、コスプレかよ」
野次馬の先頭ではアニ研の奴らとギャルゲー同好会の奴らが鼻息荒くポジションを確保していた。
「おい、どけよ。何でカメラなんか持ってんだよ」

「あー、ユウ君！」
「ユウ君……？」
見ると開け放したドアの向こうには昨日の夜真奈美とすれ違った高等部の女子生徒が、かなり露出度の高い真っ白な天使のコスプレを身にまとってユウジのほうに手を振っている。
「うわ……」
「おーい、どうした」
ケイスケが後ろのほうから野次馬を蹴散(けち)らしながらやって来た。
「なんだ？　またお前のファンか？　それにしても、なんかすごいな」
「いや、うん、ていうか……」
「とりあえずこいつら追い出してドア閉めようぜ」
ケイスケは暴力的な手段で野次馬を追い出し、
「どうしても撮影したい奴は一人一万円な」
と言ってバタンとドアを閉めた。
「さて」
バタンとドアが開いて男が入ってきた。
「ぼ、僕はアニ研の部長の木村だ。ほら一万円払うから……うげッ」
ケイスケの蹴りがいい具合に入り、そいつはドアの外に転がっていった。バタンとドアを閉める。
「で、あんた誰？」
と、コスプレ少女に向かってユウジ。
「えと……誰にも内緒だけど、実は私、天使なの」
「えと、あはは……ここ、笑うとこ？」
「なーんてね」
と、少女は舌を出してウィンクした。
自称天使はいつの間にか高等部の制服に着替えていた。名前は『凛(りん)』といい、高等部の一年生だそうだ。
「凛(りん)ちゃん、勝手にサークル会館に入ってきちゃだめよ、変なお兄

さんたちいて危ないから」
あとからやって来た真奈美が少女を優しくなだめる。
「青海苔女」
喧嘩を売っているのか、凛は真奈美を指差してにやりと笑った。
「ぶは……ぐわッ」
とばっちりを受けたユウジの死体が床に転がる。真奈美は拳を握りしめてぴくぴくしている。
「まあまあ、せっかく来たんだから、練習でも見ていったら」
と、ヤジさんが言った。ヤッターと言って凛はヤジさんに抱きついた。
「なんかまるで親子だな」

ヤジさんがスティックでカウントを取り、ドラムからイントロに入る。真奈美がチューニングを済ませたおＮＥＷの――中古だが――白のストラトでコードをバッキング、ケイスケがそれに被せてギターソロを奏でる。
「お、なんか今日調子いい」
ケイスケの指はいつもの二割増しくらいにスムーズな動きだ。自然とアドリブも冴える。
「速えー、ケイスケ走っとるな」
ドラムのヤジさんが即座に反応する。つられるようにベース、キーボードがグルーヴを醸しだし真奈美のボーカルが気持ちよく乗っかる。

「俺たち最高」
「ていうか今日のケイスケすごすぎ」
練習を終えた五人と女子生徒一人は、サークル会館から裏門を抜けて、飲食街へ向かう道に出た。
「なんか今日みんな調子よかったですよね」
と、柚木。

「ほら、やっぱり地獄屋閉まってるから」
「天国堂はいっつも開いてるけどな」
地獄屋と天国堂は隣同士で建っている。
「天国堂は仏具店だから、常に開いてないといけないんだな。俺らにゃ関係ねーけど。……でも天国堂のおばちゃんキレイだよなー」
「マジで？　俺見たことないや。ていうか入ったことすらない」
「天国堂のおばちゃんは地獄屋のおじちゃんのことが好きって知ってる？」
と、凛が会話に混ざる。
「うっそー？」
「逆じゃね？」
「あのきれいなおばちゃんがあの極悪狸のことを？　ありえねー」
「ほんとは地獄屋のおじちゃんもおばちゃんのこと好きなんだけど、おばちゃん、筋金入りのドSだから、おじちゃん、ひーひー言って逃げ回ってるんだよ、きっと」
「あはは、なんて言うかたくましー」
「だよねーたくましいよねー」
「いや、凛ちゃんの想像力が」
「……想像じゃないもん」
と、凛は一瞬シュンとする。
「あ、でもこれは購買部のお姉さんが言ってたことだけどね、高等部の湯川教頭が……」
どうやらこの女子高生、話し出したら止まらない性質らしい。

五人と一人はなぞなぞ亭で腹を満たし、飲食街の出口で別れてそれぞれの家路についた。方向が同じ真奈美とユウジと凛は公園を突っ切る近道をとぼとぼと歩く。
「ギターって結構重いよねー」
「シンセのほうが重いぞ」
「シンセは担いで歌わないでしょ」

などとどうでもいいことをしゃべりながら歩いていると、凛がいつの間にかコスプレの格好をしていた。
「おいおい……」
「しっ……なんかくる」
凛は真剣な表情で辺りをうかがっている。
「どうした？　凛。何かいるのか？」
「あ、あれ何？」
真奈美が指差した先には、街灯の下にうずくまる黒い影があった。三人がそっちを注視していると、
「うひひひひひひ」
と、反対側の茂みから何かが飛び出してきた。
「隙ありいいいい」
「いやあああああ」
一瞬の出来事だった。振り向きざま真奈美は悲鳴をあげながら、迫ってくる何かにギターを振り上げ、そして振り下ろした。ボコっという鈍い音がして、それは地面に倒れた。
「な、なんだ？」
バサリ、と凛が降りてきて、
「真奈美ちゃんすごい！　初めてなのに完璧に使いこなしてる！」
ユウジがうつ伏せに倒れている『それ』を足で仰向(あおむ)けにさせると、『それ』は夕方騒ぎがあったときのアニ研の部長だった。凛は自分の頭の上で光るリングを取り、なにやらぶつぶつ唱えながらアニ研の部長の腹上に乗せた。うぎゃああという断末魔とともに部長の口から黒い煙がすうっと立ち上がり宙(ちゅう)に消えた。
「いったいどういうことだ？」
「つまりこういうことね。あそこの黒い影に私たちの注意を向けといて、こっちの茂みからいきなり襲おうとして、失敗したのね」
「いやそれは説明されなくてもわかるから」
放心して固まっていた真奈美が、チンと音が鳴ったように活動再開した。

「痴漢！　死んじゃえ、このこの」
真奈美は伸びているアニ研部長の腹を蹴りまくっている。いつのまにか制服に戻った凛も、一緒になって蹴っている。
「なんか気持ち良さそうに蹴ってるけど、その辺にしとこうぜ、真奈美、凛」
ユウジは真奈美と凛の襟首（えりくび）を引っ張って、部長から引き剥（は）がした。

SCENE　02：コスプレ少女降臨　（つづき）

一緒に蹴ったことで友情が芽生えたのか、真奈美と凛はまるで姉妹のように手をつないで歩いている。

「ありがとう。ここでいいよ」

ここは真奈美のアパートの前。念のため、ここまで送ってきたのだ。

「ユウジあとよろしくね。凛ちゃん、ユウジに襲われないようにね」

「おいおい……」

「はーい。大丈夫大丈夫ー」

と、凛は真奈美のほうを見上げて、にかっと笑った。

「あ……まあ、青海苔付けてれば大丈夫かもね、魔除け魔除け、ぷ」

真奈美はごきげんな様子で走り去った。凛はしゃがみこんで悔しがっている。

わずか五分の……薄っぺらい友情だった。

「ねえねえユウ君」

「だからそのユウ君って――」

「天使の輪っか、つけたことある？」

「ねーよ。――ていうか何だよ、さっきのイリュージョン。どうせヤラセだろ？　いや、グルだろ。種明かしはしなくていいから。そういうの聞いてもわかんねーし、興味ねーし」

「ふーん……」

凛のいたずらな瞳がちりりと光った。

「……」

「……」

「なんだよ！」

「えいっ」

「わ、やめっ、なにすんだ」

「いっちょ上がりー」
ユウジの頭の上には、天使の輪っかがついていた。
「これでおあいこね」
「意味わかんねー」
「あ、それしばらくは、はずせないから」
「はあ？」
「じゃあね、おやすみなさい、バイバイ、らぶりー、ユウ君」
と、ウィンクをして、凛は走り去った。
その夜、ユウジは頭がまぶしくて眠れなかった。
「……アイツ絶対、ぶっ殺す」

SCENE　03：エコだろ？エコ　（前）

翌日、ユウジはすべての授業をサボることに決め、朝からアイマスクとペットボトル持参で邦研部室に引篭もった。
ユウジがアイマスクを付け長椅子に横になって暗闇を楽しんでいると、真奈美と真奈美の友達の伊集院加奈が弁当を片手に部室にやって来た。
「あれえ、めずらしいわね、ユウジ。何してるの？　天使ごっこ？」
「ああ、もう昼か。しまった食いもん買っとくんだったな」
「どうも、お邪魔いたします、真奈美さんの友人の伊集院加奈と申します。……あの、これ、そこのコンビニエンスストアで買ってきたものですが、よろしかったらどうぞ」
加奈は天使のような可愛らしい微笑みでユウジに挨拶をすると、マイ・エコバックからサンドイッチを取り出した。
「あ、どうも」
「だめよ、加奈。捨て犬に餌をやっちゃいけないって言われたでしょ？　結局、ついてきちゃった仔犬を連れてかれて、一日中泣いてたことあったじゃない」
「うふふ、真奈美さんそれはもう十年以上も前の話ですわ。それに、ユウジさんが連れて行かれても、私、泣いたりしませんわ」
「うーん、……それもそうね。じゃあ加奈、私とお弁当、半分こする？」
「はい、よろしければ！」
と、加奈はこぼれるような笑み。
「……つ、つっこみどこが」
ユウジは二人の会話に参加するのをあきらめ、再びアイマスクを付けて寝る体勢に入った。
「で、相談って何？　加奈」
「ええ、相談ってほどのことではないのですが、実は私、茶道部か

ら門限をしようと思いまして」
「それは大変ね」
つまりこういうことだ。城見ヶ丘学園大学サークル会館三階西側に部室を持つ茶道部は、最近まともな活動をしておらず、サークル活動と称しお菓子を持ち寄ってお茶を飲みながら喋っているだけなのだそうだ。まあそれはそれで楽しいのだが、加奈は最近体重のほうが気になる。それでいっそのこと茶道部を辞めてしまいたいが、辞めてしまうと部員経由で御両親に知られてしまい、門限が早くなってしまう。門限が早くなるのも嫌だし、体重が増えるのも嫌だ。一体どうすればいいだろう、という相談だ。ちなみに加奈の実家は厳しく、サークル活動は茶道部以外認めてもらえないらしい。
「お菓子我慢して、お喋りすればよくね？」
なんとなく会話を聞いていたユウジがアイマスクのまま口を挟んだ。
「それが出来れば辞めようなどとは思いませんし、それに、どうしても茶道部でお喋りしたい、というわけではないんです」
「だよな……」
真奈美が何かをひらめいたように顔を輝かせた。
「門限を、無視すればいいのよ！　ついでにサークルも好きなのに入れば！」
「あーそれいいかもです！」
「じゃあ、加奈は今日から邦研のマネージャーね」
「はい！」
「……」
――こうして邦楽研究会に、伊集院加奈が加わった。めでたしめでたし。
女の子二人が授業に戻り、退屈したユウジが一人でキーボードを弾いていると、ヤジさんが入ってきた。
ヤジさんはユウジの頭を指差して、

「光っとるな」
「そうなんです……」
ヤジさんはユウジに近づくと、まじまじと観察した。そして、まぶしく光る輪っかの見えない紐を、――カチャ、カチャ、カチャ――と、引っ張った。光は一度目で半分になり、二度目でオレンジの豆球になり、三度目で消えた。
「エコだろ、エコ」
と、言うと、ヤジさんはニヤっと笑って去っていった。いったい何しに来たのだろう。
「ていうか蛍光灯(けいこうとう)かよ！　クソ、凛のヤツ、絶対殺す」

SCENE　03－2　：　エコだろ？エコ

夕刻、メンバー五人と新マネージャー伊集院加奈がそろい、そろそろ練習を始めようかと準備していると、サークル会館の下のほうでものすごい爆発音がした。

「なんだ、バスガスバクハツか！」

一同がぞろぞろと三階の空中回廊（くうちゅうかいろう）に出ると、一階の中庭で、なんと天使の凛（りん）ｖｓグロテスクな悪魔の戦闘がおこなわれていた。

「ふはははは、とうとう追い詰めたぞ。そいつを渡してもらおうか、天使」

「あんたなんかに渡せるわけないでしょう！　悪魔タムラノドン。でも十万円払うなら渡したげるわ」

凛は手に持った黒い布のようなものを、守るようにしている。

「十万円でいいんだな。よし。手下ども、現れよ！」

ホイーホイーっと十人の悪魔の手下どもが手に手に一万円札を持って現れた。凛は完全に囲まれてしまった。

「何やってんだ、アイツ」

「なんか墓穴（ぼけつ）掘ってるみたいだな」

「見て、十万円で売るみたいよ。お金を回収してるわ」

「でも、こういうのってだいたい、宝物は盗（と）られた上でぼこぼこにされて、お金も持っていかれるんですよね……」

「――おい、凛のヤツ、十万円持ち逃げしてるぞ、ていうか、わあ、こっちきやがった」

凛は翼を使うと、一気にサークル会館三階まで飛んできて、お札の枚数を数えながら練習室の中に逃げ込んだ。おのれー、と悪魔のタムラノドンと手下たちは、階段を使って上ってくる。ユウジたちはぞろぞろと練習室に戻った。

「なんかの子供向け特撮の撮影？」

「結構、リアルだな。演技」
「悪魔役の人、映研の田村先輩だよね」
「柚木君、これ着て！」
と、凛がさっきの黒い布のようなものを柚木に押し付けた。
「ぼ、僕？」
「そう、柚木君、武器持ってないし……線は細いから似合うと思う、絶対似合うって！」
それは、赤いバラの刺繍の入った黒のチャイナドレスだった。
「私が作ったの」
と、ウィンクして得意顔だ。
「僕も出るの？！　映画に」
「それはもしかして……」
と、新マネージャーの伊集院加奈。
「着た者の基本能力を向上させると同時に、隠れている悪魔をおびき寄せる効果があるという……祝福アイテム、ローズンブラック――」
「ローズンブラック？！」
「加奈ちゃんじゃない！　おひさしぶり。でも挨拶はあとね。さあ、早く着替えて、時間ないから」
タムラノドンの叫び声が徐々に近づいてきている。
「こ、ここで？」
「そうよ！」
「わ、わかったよ、じゃあみんな、後ろむいてて」
柚木は訳もわからずごそごそと着替えている。みんなは後ろを向いてじっとしている。
「なんかちょっとエロイな、着替えてる音が」
タムラノドンの声がそこまで迫り、バタン、とドアが開いた。
「ふはははは」
「着替え中！」
バタン、とドアが閉じられた。

約一分後、着替え終わった柚木の、
「どうかな？」
という声で、みんな振り向いた。女装した柚木を見て、
「わー似合う似合う」
「柚木君カワイイー」
と、これは女性陣。
「うん、まあ、いいんじゃね？　ぷ」
と、男性陣は苦笑いしている。
「入っていいよー」
バタン、とドアが開いた。
「ふはははは、待たせたな……って、何でローズンブラックを男が着てるんだ！　その子かその子が着るのかと思ってドアの外でわくわくしながら楽しみに待ってたのに！　許せん、食らえ、タムファイヤー」
いきなり戦闘が始まった。
「きゃあああ」
タムラノドンは腐臭を撒き散らしながら、尻尾攻撃をしてきた。真奈美と加奈が重点的に狙われているようだ。尻尾が加奈の腕に当たり、ブラウスの袖がびりりと破れた。
「いやあああ」
「ちょ、田村先輩、やりすぎじゃないのか？」
「みんな、ちゃんと戦って！　正義の力で悪を倒すの！」
凛が空中から勝手なことを言っている。
「悪魔タムラノドンを倒したら、一人一万円あげるから！」
全員の目がキラリと光った。にわかにその場の空気が殺気立つ。
ヤジさんがバスドラの8ビートを刻み始めた。
「雰囲気出るのはわかるけど、ちょっと唐突過ぎだろう、ヤジさん……」
興奮したケイスケが景気付けに緊迫感のあるギターソロをかます。
「お前もか、ケイスケ！」

と、ユウジのつっこみ。だが誰も聞いてない。
「がんばれ柚木、今日はお前が主役だ」
柚木はケイスケに背中を押されて、一歩前へ出てしまった。
「ぼ、僕が？」
「ローズンブラック着てるから戦闘力上がってるんだろ？」
「わ、わかった」
「ふはははは、お前が相手か。よろしい、ただし、こっちが勝ったらそこの女にローズンブラックを着てもらう」
「え、あたし？」
と、真奈美。
「つまりただの変態だな」
精神統一を終えた柚木が、ギリッと一歩出た。少林寺拳法の構えだ。
勝負はあっけなく付いた。柚木の繰り出した蹴りがタムラノドンの急所に当たった。タムラノドンがふらふらと倒れこみそうになった先には、ギターを振り上げる真奈美がいた。いやあああ、という悲鳴とともに白いギターがタムラノドンの顔面に思いっきり叩きつけられた。
「ヤッター」
歓声が上がる。タムラノドンはすっかりのびて横たわっている。
「ユウ君、トドメ、トドメ。昨日あげたリングで」
「あ、ああ、これか」
そういえば昨日凛がやってたな、リングを腹に乗せてぶつぶつやると口から黒い煙が出てきて……と思いながらユウジは、見えない紐を――カチャ――と引っ張った。
「あれ？　点かない」
――カチャ、カチャ、カチャ――何度やっても点かない。
「バッテリー切れだな」
と、ヤジさん。
「ちょっともう、なにやってるの？　ユウ君、肝心なときに」

そうこうしているうちに、気絶しているタムラノドンから透明なタムラノドンが分離して、
「次もうまくいくとは思うなよ――ふはははは」
と言って、去っていった。
「あーもう、逃げられちゃったじゃない！」
みんなは非難の目でユウジを見ている。
「グ、グレてやるー」
泣きながらユウジは走り去った。

SCENE　03－3　：　天使の役目

「じゃあこういうことか？　凛ちゃんは天使の中でも権天使というヤツで、人間を使役して悪魔を倒す、と」
　邦研のメンバーと凛は、焼肉屋『どんぶらこ』で加奈の歓迎会兼タムラノドンとの戦闘の打ち上げをしている。もちろん凛がタムラノドンから巻き上げたお金でだ。
「そうなのー。ちなみに、そこにいる加奈ちゃんは守護天使で人間を祝福する役目、そっちのヤジさんは主天使で天使たちの動向を見守る役目……」
「ちょーっと、ユウジ、それ私が育ててたやつなんだけど！」
「え、俺のために焼いてくれてたんじゃねーの？」
「あんたねえ、どういう育ち方したらそういう考えになるのよ！」
「まあまあ、真奈美さんには私が育てたこのお肉をあげますから」
　焼肉屋では定番の会話。
「でね、でね、大天使ミカエルって人がね……」
「相変わらず凛ちゃんは想像力、立派ですよねー」
「あーっ！　柚木、お前、焼肉にマヨネーズかけるな、気持ち悪いだろうがっ！」
　定番じゃない会話も盛り上がり、何かと騒がしいメンバーだ。

　一同が十分に腹を満たし焼肉屋『どんぶらこ』を出ると、邦研の先輩が通りかかった。
「あーミッチェルさんだ」
「わー偶然ねえ。練習がんばってる？　最近、派手にやってるらしいじゃない？　いいなあ、なんだか楽しそう」
と、三年生のミッチェルさん。なぜミッチェルなのかはわからないが、見た目はバリバリの日本人女性だ。
「まあな。そっちはスタジオか？」

とヤジさん。優しそうな声だ。
邦楽研究会では伝統的に、新人がサークル会館の練習室を使い、二年生以降は大学横のスタジオで練習することになっている。だから合音前のこの時期、ユウジたち新人メンバーが先輩たちと顔を合わせる機会はあまりない。
「うん、まあ……」
「どうかしたか？」
ミッチェルさん、少し声をひそめて、
「うん、色々あってね」
少し疲れた感じのミッチェルさんは色っぽい。
「そうか……あ、ちょっとミッチェルと話あるから、先帰るわ」
と、ヤジさんはユウジたちに軽く手を上げミッチェルさんと並んで去っていった。

「はああ」
と、ケイスケが大きなため息をついた。
「何だよケイスケ」
と、ユウジ。
「ガキだよなあ、俺ら」
「はあ？……そうかな？」
「ミッチェルさんのギターって、すっげーカッコいいんだよ」
「……そっか」
「ユウ君、ユウ君」
「何だ？」
ユウジが振り向くと、天使の人差し指がぷにっとユウジの頬に突き刺さった。
「だから何なんだよ」
「うふ」
「……ちっくしょー、凛ちゃんのばかー」
ケイスケは涙を拭いながら走り去った。これを後ろのほうで見て

いた真奈美たちは、青春だねい、などとしみじみしている。凛は馬鹿と言われたショックでその場に立ち尽くしている。
「馬鹿って言うほうが馬鹿たぃ、馬鹿大臣！」
「お前が空気読めずにひっかき回すからだろ！」

例によってメンバーは飲食街の出口で別れ、それぞれの家路についた。ユウジは真奈美をアパートまで送ると、凛と二人でとぼとぼと帰り道を歩く。
「で、このバッテリーの切れたリングだけど、どうやって充電すんだ？」
「えーとそれはケータイを充電するときみたいに充電器にひっつければいいんだけど、そのリングは外せないからユウ君が体ごと引っ付けばオケイ」
「何に引っ付けば、いいんだ？」
「天使に」
と、凛は自分を指差している。
「あ、そ。じゃ、いいわ。別に光ってても光らなくても関係ねーし」
「えーそんな、遠慮しなくていいってば、タダなんだから」
「タダとかそういう問題じゃねー」
「一晩もひっついてれば満タンになるよ？」
「泊まるのかよ！」
「抱き枕になってあげるから」
「イラね」
「照れちゃって、ユウ君たらかわいい」
「うぜえええ」
――そんなこんなで長い一日が終わった。

SCENE　04－1　：　日曜日に喋る猫

日曜日、一人暮らしのユウジには一週間溜(た)め込んだ家事が待っている。洗濯や掃除はもちろん、４ＬＤＫ庭付き一戸建てに住むユウジは庭の草むしりの仕事までしなければならない。

「メイド、ほしいな」

「ユウジー」

玄関から真奈美が、庭仕事に精を出すユウジに手を振っている。

「遊びに来てあげたわよ」

「真奈美、最近言葉遣いがツンデレっぽくね？」

「そ？」

「で、なんだ？　俺のメイドになる決心がついたか？　メシとか作ってくれるのか？」

「無理」

「だよな……伊集院さんなら――」

「言っとくけど、加奈はお嬢様なんだからね。元茶道部だけあって、お茶入れるのは得意だけど、家事とかは出来なさそうよ」

「そうなのか……で、何しに来たんだよ？」

「うん、新しく作った曲のことでユウジに意見を聞こうと思って」

「ふーん、まあ、あがれよ」

天気がいいので、二人は縁側(えんがわ)でジジババのようにお茶をすすりながら話すことにした。

「うん、予想通りユウジのお茶はまずい」

「うっせ」

どこからかやって来たちっちゃな三毛猫が、縁側に上がって尻尾(しっぽ)をぷらぷらさせている。

「あー、かわいいー」

仔猫は真奈美の膝(ひざ)の上にのって、気持ち良さそうに目を閉じた。

「わしのように数百年も生きておる猫は世界に２００匹あまり。だ

がそのむかし天使だった三毛猫というとそうはおるまいて」
「ひえっ」
「わしの猫名はシャミセン。天使だったころは熾天使シャミエルと呼ばれておった。――おお、おお、ここはよく結界が効いておってよい場所じゃ。わしが三毛猫でなかったらものの十秒で砕け死んでおるわい」
「よくわからんが、なんか各方面からパクリまくってないか？」
「おぬしらいずれかの守護天使の仕業か、はたまた他の誰かのための結界か……いずれにせよ、おぬしらの守護が本物ならば、またどこかで会うこともあろう。苦悶の死を運命られた身とあらば、戦うしか道はないのでのう――おお、おお、蝶々が飛んできおった、おお、おお」
三毛猫は無邪気に蝶々を追って、どこかへ行ってしまった。
「あ、でね、新しい曲のことなんだけど」
「喋る猫は華麗にスルーかよ！」

「懐かしいー、この杏子の木。小さいころよく登って遊んだよねー」
真奈美は庭の杏子の木にいとおしそうに近寄る。
「はあ？　何で真奈美が俺の子供のころの話、知ってんだよ」
「え、ユウジそれマジで言ってるの？」
「確かに五歳まで俺はこの家に住んでたけどな。母親が死んでからは田舎の親戚のうちで育ったんだ」
「で、去年までこの家は菊池さん一家に貸してたけど引っ越しちゃったから、この春大学入学を期にユウジ一人で戻ってきたんでしょ？」
「そうそう。詳しいなあ、真奈美、卒業後はストーカーか探偵か霊能力者になれるぜ……ていうか、もしかして――真奈美って幼なじみの、まなみん？」
「うわ、信じらんない……十三年も経てばそりゃあ変わるけど――ていうかずっと気付いてなかったわけ？！」

「信じらんねー。あの天使のように可愛いかったまなみんがこんな凶暴な美人になってるなんて……」
真奈美は凶暴と美人を天秤にかけ微妙な表情(かお)をした。だが凶暴が勝ったようだ。真奈美の拳がユウジの顎(あご)に入る。
「うごッ」
「ユウジ……あの優しそうだったユウ君がどうやったらここまで憎たらしくなるかな。良くなったのは見てくれだけね！」
「痛ってーなー、俺の美しい日々の思い出を返せー！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1368d/

ＲＯＣＫ‘ｎ’ＡＮＧＥＬ

2010年10月10日16時22分発行